

〈研究ノート〉

社会美のつづり方—授業実践からの報告（1）*

宮 原 浩 二 郎**

「社会美学」はゆっくりと確立の途上にある。現在までの主な成果としては、私自身と藤阪新吾による一連の論考がある。しかし、それだけではない。関西学院大学社会学部・宮原ゼミにおける教育研究実践もまた一定の成果を生み出している。本稿では、「社会美のつづり方」を中心に、これまでの授業実践の成果を報告する。同時に、この作業を通じて、社会美学の特色がより明確になり、より理解しやすくなることを目指したい。

1 社会美学の授業実践

私がはじめて学部ゼミの研究テーマとして「社会美学の探究」を掲げたのは2007年度からである。その頃ようやく、社会美学の全体像が自分なりにつかめてきたこと、また、関連文献や参考資料、フィールドワークの方法など、「社会美学」をテーマとして講義やゼミ活動を行い、卒業論文の作成指導にあたる準備ができてきたことが大きい。やや見切り発車のスタートでもあったが、予想以上に多くの学生たちがこの「確立途上の新たな研究分野・方法」に大きな関心を示し、意欲的に取り組んできた。その結果、社会美学的な観点を一部に取り入れた卒業論文がすでに約40本、より自由で短いエッセイ風のゼミ・レポートであれば100以上が書かれている¹⁾。これらの論文やレポートについては、定期的なエッセイ検討会や計

画段階からの卒論検討会を通じて、お互いに批評し合う機会を設けてきた。さらに、関連の講義にともなうレポートや答案まで入れると、大量の関連資料が私の手元に積み上げられてきた²⁾。

私はこれらのレポートや卒論の作成に際して、各人にとっての「社会美」体験を率直かつ丁寧に「つづる」ことを勧めてきた。社会美学は日常の何気ない「人と人の交わり」のうちに美を見出し、これを「社会美」とよぶ。社会美学の出発点は、何よりもまず、各人が自分自身の「社会美」体験に気づくこと、そして、この体験を言葉として客体化し、他者と共有していくことである。そのため社会美学の授業では、通常の文献・資料にもとづく研究だけでなく、参加者一人一人による体験記の提出が求められる。この体験記が共有されることで、それ自体が共同的探究のための素材として役立てられていく。

参加学生からしても、私自身にしても、多種多様な「社会美」体験にふれ、また、思いがけない着眼や感性の働きにふれることは実に楽しい機会である。社会美学の醍醐味の一つは、あきらかにこの「社会美」体験の相互報告と相互批評のうちにある。とはいえ、この相互批評が有意義であるためには、各人による体験記が真率に書かれていることはもちろん、肝心の「社会美」体験を的確に描き出していることが必要になる。それは自由で率直なエッセイであることが望ましいが、かと

*キーワード：社会美学、社会美、人と人の交わり、共的快感

**関西学院大学社会学部教授

- 1) 「社会美学の探究」をテーマとしたゼミは現在の3回生で四代目を迎えている。学生は3-4年次の2年間ゼミに所属するので、2007年度入ゼミの一代目（2008年度卒業）、2008年度入ゼミの二代目（2009年度卒業）、2009年度入ゼミの三代目（現4回生）および2010年度入ゼミの四代目（現3回生）の4グループである。各代には20名を少しこえる学生がいるので、卒業論文数は40以上になる。また、社会美体験に関するレポート提出が3年次から4年次にかけて2回あるので、レポート数は100以上になっている。
- 2) 主なものとして、2007年度「現代社会学特論C」と2009年度「文化社会学A」および「文化社会学B」がある。

いって勝手気ままな恣意に任せてしまってもいけない。

そこで、ほんの入り口の自由な体験記であっても、記述対象の意識化、その焦点のしぼり方など、「社会美のつづり方」に関しての考察が欠かせなくなってくる。以下では、ここ数年の授業実践をふり振り返りながら、「社会美のつづり方」について、さらには社会美の考察方法について、いくつかの原則のようなものを書き記しておきたい。

2 社会美をつづるということ

社会美の例示—二つのエピソード

社会美学の実践にとって、各人の会合う多様な「社会美」について自由につづってもらうことが重要な出発点となる。とはいえ、「社会美」という言葉には「都市景観・街並み」「マナー・エチケット」「社会的美意識・公衆道徳」などの漠然とした連想が働いたため、一度はこれをリセットする必要がある。「社会美」の本質はあくまでも「人と人の交わりのうちに煌めく美しさ」にあり、「社会的状況の美しさ」にあるからである。この意味での「社会美」が直観的であれ感得されてはじめて、各人はそれぞれの「社会美」体験をつづることができる。

「社会美」の理解は概念的説明だけでは難しい。誰かが確かに体験した具体的な事例を示すことが早道である。そこで私は二つの事例をとくに頻繁に用いてきた。

一つは（本人が当事者でもある）もっとも単純な二者関係のエピソードである。……ある春の日の午後、「私」（報告者）はたまたま近くを歩いていた初老の男性から最寄り駅への道を尋ねられた。同じ駅に向かっていた「私」は同道することにした。その間、心地よく会話しながら、二人は爽やかな笑顔で最寄り駅の改札口に到着した。相手も同じ方向の電車に乗ることがわかった「私」は一瞬、相手をどうやりすごすか、意識する。が、その一瞬、初老の男性は「では、失礼します」と別の車両へ去っていった³⁾。……二人の間には短いが印象的な交わりがあった。報告者はこ

の小さな社会の質感を味わい、それを「美しい」と感じている。報告者によれば、二人の関係性は「ちょうどシルクのリボンが結ばれ、また、ほどけるように」生まれ、また、消えていった。その様子が「美しい」というのである。

この「シルクのリボン」のエピソードに出てくるのは、ささいで偶発的な二者関係にすぎない。それでも私は、社会美体験の例示として、このエピソードを用いてきた。一つは、よくある「美談」とはちがひ、報告者が相手の個人的人格や容姿、振舞いなどではなく、まさに相手と自分との関係性そのものに着目し、その「関係性を味わう」ことに成功しているからである。個々人の人格、振舞い、容姿を批評するのが「個人美学」だとすれば、ここでの交わりや関係性に対する批評こそが「社会美学」的である。

もう一つは、「シルクのリボン」への言及からも明らかなように、報告者が道徳的評価ではなく美的判断を行っている点に注目したい。もちろん、この場面での二人の振舞いは道徳的でもあるが、報告者自身の着眼はあくまでも美的・感性的 aesthetic なものである。社会状況の「よさ」を判断する基準が道徳性ではなく美・感性におかれているのである。

もう一つの事例は「工事現場をのぞき込む男の子」のエピソードである⁴⁾。……ある日「私」（学生）が街中の歩道を歩いていくと、行く手には水道工事の大きな穴が開けられていた。前を行く小さな男の子が母親を振り切って駆け寄り、穴の中をのぞき込む。すぐ近くの作業員のおじさんが男の子にそれとなく気を配り、好奇心を満たしてあげる。追いついた母親が作業員のおじさんに恥ずかしそうに何度もお辞儀している。……親子のすぐ後ろにいた「私」はこの一瞬の光景を「美しい」と感じる。

この「工事現場をのぞき込む男の子」のエピソードでは、報告者を含めて4人の登場人物の視線や感覚が交錯し、「シルクのリボン」よりも複雑な社会関係とより現実的な空気感（響き渡る重機の震動も含めて）が示されている。すぐ間近にいた報告者は思わずその慎ましくも爽やかな空気

3) ゼミ・レポート（2007年度）から要約。

4) 「現代社会学特論C」（2007年度）の最終レポートから要約。

を共有し、その「美しさ」を味わったのである。この報告の焦点は作業員のおじさん個人の振舞いではなく、4人の交わりの場合全体の雰囲気に合わせている。「個人美」ではなく「社会美」が感得されているのだ。その上、危険な工事現場を子どもにのぞかせるという、道徳上疑義のある状況を含みながら、その場の全体が美しく魅力的な社会空間として感じとられていることが重要である。社会通念や道徳のまなざしとは別の、社会に対する美的・感性的 (aesthetic) なまなざしが宿っていることに注目したい。

「社会」の美を意識する一ゆるやかな方法論(1)

それでは、以上のような実例を示しさえすれば、誰もが社会美について有意義な記述・考察を展開できるようになるのだろうか。ここ数年の授業実践から明らかになってきたのだが、事はそう簡単ではないようだ。当然ではあるが、社会美学の実践にもやはり最低限のゆるやかな「方法」のようなもの、少なくとも心構えのようなものが必要になってくる。その一つは、芸術作品や自然風景ではなく、また、個々の人物の容姿や振る舞いでもなく、「社会」そのものの美をとらえるような態度・姿勢を感得することである。

個々の事物や人物でなく、また、人々の行動でもなく、社会的な交わりや関係性そのものを味わうのだということ。そして、社会的状況のうちにつつましくも煌めく美を感受するのだということ。これは何度でも強調していく必要がある。

そのために私は、誰もが納得しやすい説明として、「美しいカップル」のイメージについて考えてもらうことを試みてきた。その目的は、カップルを構成する各々人（男女でも、男同士・女同士でも）の容姿や行動ではなく、まさに二人の交わりの質感、その関係性の醸し出す空気感を味わうような姿勢・態度に注意を向けることにある。

どんなに美男美女の二人がペアになっているからといって、あるいは、いかに人柄の優れた二人が一緒にいるからといって、それだけでは必ずしも「美しいカップル」とはいえない。逆に、個々人の容姿や性格はさておき、二人の関係性そのもの、二人の交わりの様子、その雰囲気が美しいということがある。しわだらけのお婆ちゃんと腰の曲がったお爺ちゃんでも、その二人が睦み合い、互いに気遣いし、笑い合う様子が「美しい」。そういう関係性の美があるだろう。これこそが「社会美」の元素である。社会美学的な意味での「美しいカップル」とは、こうした意味の社会美を周囲に放散させているようなカップルのことである。

もう一つ、より抽象的になるが、「関係性そのものを味わう」という場合、人々の交わりの間にある「テーブル」をイメージするのが有効である。まずは、人々が食卓で歓談する場面に注目する。そのとき、特定の個人の動きに注目するのではなく、人々の間にある食卓とその雰囲気の全体を感じとろうとする。個々人を「見る」のではなく、食卓の場全体を「観る」のである。ここから進んで、実際の「テーブル」がない場合にも、人々の間にあたかも「テーブル」があるかのようにイメージし、その「テーブル」の感触を味わうことを試みる。「テーブル」のイメージは人と人の交わりとしての「社会」を感じとり、味わうための手がかりを与えてくれる⁵⁾。

社会美は人間に関わる経験ではあるが、個々の人物の性格や振舞いを味わうことを第一目標とはしていない。あくまでも人々の間の交わりや関係性を味わうこと、状況としての「社会」を味わうことが第一である。そのためにこそ個々人の振る舞いの細部に注意を向ける必要が生じるのであって、その逆ではない。「社会」がそれ自体は目に見えない「関係の網の目」であることは何度でも強調する必要がある⁶⁾。

5) 「テーブル」への着目については、藤阪新吾「テーブルとしての社会」『関西学院大学社会学部紀要』第109号、2010年に詳しい。

6) 「社会美」を感じる「社会」には二人以上の個人の間の相互行為が進行中であることが前提されている。とはいえ、一人しかいない場面からも「社会美」を感じとる可能性がないわけではない。たとえば、個人の仕草や表情が直接に社会的相互作用（関係性）を感じとらせる場合があるし、より抽象的には、「自己と自己の間の相互作用（関係性）」が感じとられる可能性もある。この問題は今後十分に検討しなければならない。ただ、社会美学の現段階では、あくまでも二人以上の間の相互作用（交わり）がある状況をベースとして社会美について考えていくのが賢明であろう。

社会の「美」を感じとる一ゆるやかな方法論(2)

美は快感をもたらす。社会美も例外ではない。それは社会を味わうに際しての「美味しい体験」にはかならない。これは大切なことである。苦痛や貧しさよりも、まずは快感や豊かさから社会を感じ、考えていくこと。ともに社会を形づくることの喜びを各人が身をもって味わうこと。そこから逆に、社会における苦痛や貧しさの問題を照らし出していくこと。これが社会美学の強みの一つである。

もっとも、社会美学における快感はたんなる快感一般ではなく、特別な「美的快感」である。ところが、多くの学生たちが社会美体験について語り始めると、いきおい平板化した「美味しい体験」が一人歩きし、この社会から得られる快感を無差別に「社会美」と誤認する傾向が一部に見受けられるようになった。この問題に対処するため、私は美的快感の特質を明確にし、これを授業実践においても強調していく必要性に迫られた⁷⁾。

美的快感がたんなる私的な生理的快感と異なることは理解されやすい。他方で、それが公的な観念的快感ともまた異なることの理解はそう容易ではない。事実、社会美体験の記述として、前者の生理的快感を持ち出す例は少ないが、後者の「道徳や社会通念への合致」がもたらす観念的快感に言及する例は少なくない。車内の席譲り、ボランティア、「エコな取り組み」、「安全・安心な街づくり」、「メディアで評判の観光スポット」、「ランキング上位のお店」のように、個々人の感性的判断を必ずしも経由せずに社会的価値を帯び、「み

んな」の意識のなかでプラスのイメージをまとった物事や場所がたくさん存在している。しかし、それらは観念的快感をもたらすだけであり、そこに社会美体験を認めることはできない。

美的快感について大切なのは、それが単に私的な快感でもなければ、また、単に公的な快感でもないということである。美的快感はほかならぬこの「私」の快感として感受されるが、それと同時に、この「私」をこえて「私たち」へと溢れ出ていく。美的快感はこの「私」だけのものでもなければ、「私」とは無縁の「みんな」のものでもない。美的快感は「共的」であり、そこには(いまだ公認されていないが)公共価値をはらむ物事への称賛に似た感情が含まれている。

こうした事情から、私は、一般道徳や社会通念上必ずしも適切とはみなされていないような社会状況のうちに、あえて社会美を見出すような事例を強調してきた。もっとも単純な事例は「老夫婦の自転車二人乗り」である。安全・安心や交通ルール遵守の規範からすれば決して称賛できないが、下町の路地の往来のなかで、その二人の関係性が美しい社会情景と感じられることがある。

「みんな」の観点からは不法であり不適切であっても、「私」にとっては貴重であり、自分一人の胸にとどめておくには惜しいような公共的価値が感じられる⁸⁾。それは身近な他者(「私たち」)に向けて語り出して初めて完成されるような快感の体験である。社会美への気づきと感受性は、人と人の交わりからなる「社会」を意識すると同時に、その状況にふれて喚起される「美的快感」の特質を自覚することを通して高められてい

7) 美的快感の特質については、宮原浩二郎「社会美学のコンセプト(4)―美的快感の社会性について」『関西学院大学社会学部紀要』第109号、2010年に詳しい。

8) もう一つ、私自身が経験した「電車内の姉妹の遊び」のエピソードがある。午後の早い時間のわりには混んだ車内で、まだ学齢期に達していないと思われる女の子二人がキャッキョと遊んでいる。すぐ近くに立っていた年配の女性にぶつかりそうになり、その場の注意が子どもたちとその母親らしき人に向けられた。すると、一人がもう一人のほったたを両手でひっぱりながら、「ブスッコ、ブスッコ!」と笑いながら囁きたてる。言われた方も大喜びでほったたを差し出し、笑いが止まらない。母親が「お姉ちゃん、そんなことしてたら本当にブスッコになっちゃうよ!」と大きな声で言うと、妹の方がすかさず「ブスッコでいいもん!」と笑い転げる。私は思わず吹き出しそうになり、母親と目を見合わせた。ふと見ると、さっきの年配女性の表情が和み、つり革につかまっていた中年男性とその隣の若い女性も微笑んでいる。あえてうなづくことはなかったが、私たちはその場に流れた温かな雰囲気とたしかに共有したと思う。私はこの小さな姉妹の関係性に、また、母親をふくむ家族の関係性に、さらには、乗客をふくむこの小さな社会状況のうちに、ささやかだが確かな「社会美」の煌めきを感じとった。このエピソードは、「自転車二人乗り」と同様、「ブスッコ」という「不適切」な言葉がもたらす軽い緊張感ゆえに、関係性の「美しさ」がかえって明確に感じとられる事例であり、これまでの授業のなかで何度か紹介してきたものである。

くのである。

以上、ここ数年の授業実践をふり振り返りながら、「社会美をつづる」ための「ゆるやかな方法論」として二点を指摘した。以下では、こうした「ゆるやかな方法論」にもとづくレポートの優れた実例を選び、社会美の記述・考察をめぐる現時点での成果について紹介してみたい。

3 社会美記述の事例から

これまでの学生レポートを整理していくと、社会美の記述には大きく分けて二つのタイプがあることがわかる。両者とも「人と人の交わり・関係性」に照準することは同じである。ただ、一方は一度限りの交わりの「瞬間」に美を感じとっている。他方は、くりかえし訪れる交わりの「場」に美を感じとっている。実際は「瞬間の美」のうちに「場の美」が包み込まれ、「場の美」のうちに「瞬間の美」が包まれているのだが、記述の力点がどちらにあるかによって、大まかに分類することができる。社会美は人と人の交わりが生起する特別の瞬間（＝時間）あるいは場（＝空間）に着目することによって、それなりに明確な記述が可能になるのである⁹⁾。

交わりの瞬間と社会美―「男の子二人の道草」のエピソード

交わりの瞬間がもたらす美しさを見事に描き出したレポートがある。自然なユーモアのある、すぐれた社会美記述として、大教室授業でそのまま読み上げたことがある。

7月の始めの昼下がり、私は大学から家に帰る途中、地元の〇〇の町を歩いていました。〇〇はすぐくほのほのとした土地で〇〇山のふもとにある町です。私が裏道に入った時、そこにランドセルを背負った小学生の男の子が2人いました。2人はそれぞれ離れていました。手前にいる子（仮にA君と名付けます）は昨日の雨によってできた水たまりにしゃがんでいました。水たまりにある水で自分のふくらはぎを洗っていました。そして少し離れて奥にいる子（仮にB君と名付けます）は路肩に咲いている花を見ながらしゃがんでいました。私はこの状況を見た時、A君は何をしているんだろうと思いました。また2人とも無言だったので、2人は一緒に帰っているわけじゃないのかなと思いました。そして私がA君の横を通りすぎ、B君の横も通りすぎようとした時、A君がB君の所へ走っていきました。そしてA君はB君に向かって「ねえ、〇〇くん、まだ足にうんこついてる？」と真面目な顔で聞きました。するとB君は花からA君に目を移し、A君の足についている茶色の物体をみて真面目な顔で「うん、まだついてるよ」と言い、A君は「そっか、わかった」と言って、水たまりの方へ走っていき、また足を洗い始めました。B君はまた花をじーっと見つめ始めました。私はこの2人の状況を見て2人の会話を聞いて笑いが止まらないうちに、いつまでも見ていたい状況だと思いました¹⁰⁾。

「私」はこの「いつまでも見ていたい状況」に社会美を感じとっている。ここでは、学校帰りの

9) 本稿では映画、小説、マンガなどのメディア作品の鑑賞における社会美体験は取り扱わない。社会美はまず何よりも現実の日常生活において感得されるものだからである。ただ、社会美に関する知的考察を試みる際には、映画や小説などの作品における人と人の交わりを対象とすることが有益な場合もある。現実体験が私たち自身がまきこまれる一度限りの体験であるのに対し、メディア体験は私たち自身のまきこまれをコントロールでき、何度もくりかえして経験可能な体験であり、社会美体験としては間接的・副次的ではあるが、対象と距離をとった客観的考察になじみやすいのである。私自身の授業実践では、北野武監督の映画『座頭市』のいくつかの場面（大工仕事の作業音がしだいに音楽に変わっていく情景など）や、ビギンの歌「昔美しゃ、今美しゃ」の詞（「浮き世の美しゃよ」）を紹介しながら考察することがある。学生のレポートでは、映画『カサブランカ』に描かれた人間関係（「いき」な関係性）や小説『太陽の子』に描かれたコミュニティ（多様なメンバーが賢愚優劣にかかわらず個性を認め合う、石川三四郎の指摘する「共進互示」の関係性）が印象に残る。より本格的な考察としては、映画『ゴッドファーザー』における「テーブルの交わり」に着目した藤阪新吾の試み（『ゴッドファーザーの社会美学』『関西学院大学社会学部紀要』第110号）がある。

10) 2009年度「文化社会学A」最終レポートから。

男の子二人の交わりの状況が、手を伸ばせば届きそうな至近距離から、丁寧に過不足なく描き出されている。報告者自身が道端の子どもたちの小さな社会に思わず引きこまれ、その交わりの空気を吸い込み味わい、爽快なユーモアとともに、ささやかな美の煌めきを感じている。ほんの一瞬の遭遇ではあるが、報告者の知性と感性が自由にのびやかに遊動し、この小さな「社会」そのもののへの美的・感性的なまなざしが研ぎ澄まされていると思う。報告者は美的快感を得、思いがけず訪れた幸福に感謝するのだが、この体験は自分だけの快感として消費されるのではない。言葉にして客体化し、他者に伝えたいという衝動力をともなっている。

この美的状況からは「よき社会」の原像が透けて見えるように思われる。私たちのそれぞれが好きなこと、したいことに思う存分没頭して、お互いの活動に干渉をすることなく、それでいてお互いの間につながりがあり、自然な信頼感が保たれているということ。一人は水たまりでふくらはぎについた「ウンコ」を洗い落とし、もう一人は路肩の花をじっと見つめている。余計な道徳や社会通念による抑圧や過剰な気配りへの圧力から自由な、人と人の関係性。「一緒にいるからこそ、一人一人でいられる」社会。私たちもまた、こうした「よき社会」のイメージを「いつまでも見ていたい」し、多くの人々に語り伝えたい。『男の子二人の道草』のエッセイは、この社会の美しさとその幸福を照らし出す散文詩のようなものである。

すぐれた社会美記述は散文詩に近づくことがある。その場合、社会状況や社会情景の記述がそれ自体で十分に楽しく、味わい深く、興味深いものになる。社会美記述はそれ自体が「作品」となり、その出来映えをあれこれ批評することもできる。これは社会美学の実践がもたらす醍醐味の一つであろう。ただ、他方で、社会美学は社会に関する知的考察を目指している。それは見て、聞いて、ふれて感じる「社会のよさ」を吟味する美的実践であると同時に、そうした「社会のよさ」が現われるための条件や筋道を考えていく知的実践でもある。社会美記述はそれ自体で有意義だとしても、そこからさらに進んで、社会美の条件や筋

道をあくまでも知的に考えることが課題となる。

「男の子二人の道草」の場合、「こどものいる情景」が一つの焦点になるだろう。アメリカの美学者 A. バーリアントは「人間関係の状況の美」に言及し、エチケットのような日常儀礼や宗教儀式のような演劇的場面と並んで、「小さな子どもとの関係性」が感性的・美的知覚を誘発することを強調している。子ども達によく見られる目的のない、コンサマトリーな遊びの情景は私たちの感性的知覚を活性化させやすい。

また、学校からの「帰り道」というのもポイントである。一般に、行き道の目的指向や効率優先の姿勢は「帰り道」ではゆるみ、道草や遊びの余地が生まれやすい。これまでの社会美学的な考察のなかにも、日常生活の商品化＝美化が進む現代社会における「感性の空き地」(W. ヴェルシュ)や、多忙な都市生活のなかで「停電」が作り出す「遊び空間」(P. クリストリーブ)、さらには現代社会が取り戻すべき落ちついた「美的聖域」としての対面的アソシエーション (J. コスノスキー) など、今回の社会美記述と照合しながら現代社会の問題と可能性を知的に考察するための知見は少なくない。

以上、「男の子二人の道草」について詳しく紹介してきた。同じように、人と人が交わる瞬間のうちに鋭敏に社会美を感じとった記述例は数多い。

たとえば、スタジアムの入り口で持ち物検査のアルバイトをした男子学生のエピソード。急拵えの検査台におかれたバッグの中身を確認しようとしたとき、男の子が彼に向かって真顔で叫ぶ。「ばく、拳銃なんか隠してないよ!」。その一瞬、報告者は男の子の両親と顔を見合わせて大笑いする。ここにほんの一瞬、かけがえのない幸福な空気が流れ込む。報告者はこの社会美を他者に語り伝えたいのである。

また、地元の神社の祭りに行った女子学生のエピソード。母親にはぐれた女の子が半泣きになってスーパーボールを見ている。すると近くにいた「ホスト風男性」が200円出して遊ばせてあげる。女の子を見つけた母親が戻ってくる前に、男性はさっと立ち去る。「お前、ほんまに子ども好きやなー」という連れの友人の声が響き、辺りにはあ

たたかな空気が流れる。

もう一つ、終電を過ぎた都心の駅前にある小さな広場の光景。「作業服」姿の男たちが騒いでいるのを、「西洋人風」の女の子が堂々と注意する。場に緊張が走るが、母親がやってきて男たちと話し始め、すっかりうち解けてしまう。やがてリーダーの男性が女の子の弟らしき男の子に「逆立ち」を教え始める。ついに男の子が逆立ちに成功したとき、大きな拍手が湧き起こる。広場にいた人々はみな、「不良風」の男たちと「西洋人風」の家族のやりとりで心奪われていたのである。

これらの体験記はいずれも交わりの瞬間に力点をおいた社会美記述である。それぞれに報告された、見て聞いて感じとられた「社会のよさ」はさまざまな想像力を喚起し、それ自体で鑑賞可能な作品性をもっている。それと同時に、この社会美がどのような条件や筋道のもとで実現されているのか、知的に考察していくための素材を提供しているのである。

交わりの場と社会美—「ちょっとした溜まり場」のエピソード

では、交わりの場の美しさに着目したエピソードに移ろう。この場合、ある特定の「よい交わり」の瞬間の味わいよりも、「よい交わり」がくり返し経験できる場の味わいに力点がある。ここで紹介するのは、学生同士が行き会うキャンパス内の「ちょっとした溜まり場」の体感記述である。

私の学生生活は流動的である。真面目な学生とはとてもいえない学生生活を送っている。それはきちんと毎週毎週、同じ時間に学校に来ていないというのが第一の理由だが、それにともない、と言うより自然と、人付き合いも流動的なものとなっている。私はそれを自分らしく、また私達らしく、美しいと感じている。そのことを端的に表しているのは、私にとっての「トライアングル」である。「トライアングル」とは〇号館前の広場のことで、寒さが厳しくなる前にはよく、そこに設置されたベンチを利用し

ていた。目的は暇つぶしとも言えるし、社交を楽しむためだとも言える。社交を楽しむ相手は友人を通して知り合ったサークルのようなもののメンバーであるが、そのサークルという縛りは非常に緩い。私自身がそのサークルに属していないし、メンバーはそんなことは意に介せず、ただただ社交を楽しんでいる。私達は自然とトライアングルに集まり、言葉・意見を交わし、バラバラと解散する。約束などは大規模な飲み会や読書会がある時以外はしない。それぞれが「誰かがいるかもしれない」という期待をもって〇号館前を通る。私はわざわざ遠回りをして来てみたりする。誰もいなければいいいいし、いたら少し話をしていこうという感覚である。これが非常に心地よいのだ。もろさ・危うさが私達の間をより魅力的にしているのである。厚底ブーツよりもピンのハイヒールに美しさを感じるのと同じだ。会話も人間関係も流れをもってつねに新鮮であるべきだ。私は2回生の夏になってから得られたこのコミュニティによって、充実した学生生活を送ろうとしている。いつ消えるかわからないが、安定した腐りやすい関係よりよっぽど美しいと考えている¹¹⁾。

この「ちょっとした溜まり場」のエッセイでも、人と人の交わりとしての「社会」の手ざわりを味わい、感性的・美的に認識しようとする姿勢が明確に示されている。「そこに行けば誰かがいて、何かしらの話をする。それぞれが特に目的なく、気ままに来ては去るだけだが、それがかえって心地よい」というような場。組織も取決めもなく、リーダーもフォロワーもなく、ただ「ちょっと話を楽しむ」ことだけが暗黙のマナーとなっているような場。仕事（勉強）とそれ以外の活動の間にある「縁側」のような空間。報告者はこの場所を「美しい」と感じている。語り口はやや説明的であり、散文詩ではないが、ここにもやはり確かな社会美体験がつつられている。

この広場そのものは校舎と校舎の狭間にあり、いくつかの樹々とそのまわりを囲む円形のベンチ

11) 2009年度「文化社会学B」最終レポートから。

がいくつか配置されているだけの場所である。少なくとも大学の広報誌やキャンパスの写真紹介で取り上げられるような場所ではない。にもかかわらず、ここには学生たちによって生きられ、味わわれている美しい社会空間がある。自然美も芸術美もないのだが、社会美だけはありそうなのだ。

ここにもまた、「よき社会」の一面が見え隠れしているように思われる。いつ来ていつ去ってもよい、流れのある、つねに新鮮な人と人の交わり。たまたま居合わせた人同士がひとときを共有し、またそれぞれに次の活動に向かう「縁側」のような場。さらにいえば、流れのなかにあるために、誰もが歓迎される自由で対等な社交空間。報告者はそうした「よき社会」の一面を自らの感性を通じて味わっている。

ふり返ってみれば、社会的意味での「美しい空間」、いわば知られざるローカルな名所は、私たちの身のまわりにいくらでもある。いまや公共施設の片隅に追いやられた「喫煙コーナー」もそうかもしれない。いずれにしても、そうした社会美がもたらされるための条件や筋道はどのようなものなのか、知的に考察していくことができる。今回の「ちょっとした溜まり場」の場合、まずはやって来ては去っていく、ゆるいつながりを楽しむ人々の態度や姿勢、さらには共有された暗黙の了解について考える必要がある。実利目的を持ち込まないこと、なまの感情をはき出さないこと、ひとときの会話をそれ自体で楽しむことなど、G. ジンメルという「社交」の原則を参照しつつ考察することもできる。そうしたゆるやかな社交的場のもつ肌ざわりや空気感について、G. ベーメの「雰囲気的美学」を手がかりに探究することもできるだろう。

また、広場の物理的空間については、大きな樹々を取り囲む円形のベンチ群の存在が、「社交性」を促している面がある。ただ、それ以外にはこれといったデザインはなされていない。「ちょっとした溜まり場」は、校舎に出入りする学生が自然にお互いを見つけ合う空間であるという、ただそれだけの条件の下に自然発生的に生まれている。場の社会美のためには、用途を細かく指定した空間デザインよりも、自然発生的な空間利用を促す余白のほうが優れていることがある。

こうした観点から、建築や空間デザインの知見をあらためて取り入れて考察することもできるだろう。

以上、「ちょっとした溜まり場」の社会美記述を詳しく紹介してきた。これとよく似た事例に「サークルの溜まり場」がある。雨ざらしのテーブルとイスがあるだけだが、いつも誰かがいて、交代で「羽休め」している。美しい景観を誇るキャンパスには「目障り」と言われることもあるが、心地よい交わりのある空間としては美しい。

この他、人が交わる場の美しさに着目した体験記は数多い。たとえば、「サッカー・スタジアムのゴール裏」。サポーターたちはまるで試合の当事者のように振舞う。ゴールが決まった瞬間、熱狂した人々は見知らぬ者同士でハグやハイタッチをくりかえし、年齢も性別もこえた歓喜を共有する。「共歓」の社会美である。

また、「観光地近くの路地」。清水寺に向かった報告者は近くの路地に迷い込む。そこには古い家並みがあり、静かな道があり、その道端で絵を描く老人たちがいる。報告者はその情景に息をのむ。歴史を含んだ「社会風景」の美である。

また、「にぎやかな美術館」。金沢21世紀美術館で現代アート作品を鑑賞するだけでなく、この開放的な館内をコミュニケーションの場として味わう。大人も子どもも普段着で楽しめ、声に出して語り合うことのできる場に美しさを感じている。

こうした社会美記述もまた、より知的な社会美的考察のための出発点とすることができる。

4 社会美の知的考察

散文詩的な社会美記述は私たちの社会的想像力を喚起する。とりわけ、見て聞いてふれて感じとられる「社会のよさ」をめぐる想像力を豊かにする。ただ、くり返し指摘してきたように、この「社会のよさ」、あるいは、社会美が現われるための条件や筋道について考えようとすれば、社会に対する感性的観照だけでなく知的考察が欠かせなくなる。以下、より知的な考察へと進む「社会美のつづり方」を取り上げてみたい。

先行研究と照らし合わせる一ゆるやかな方法論(3)

ある社会的状況が「美しい」と感じられるとき、その状況にはどのような特徴があるのだろうか。また、「美しい」と感じる当事者の態度や姿勢にはどのような特徴があるのだろうか。こうした社会美の条件や筋道を考察するのが、社会美学のもつ知的な課題である。

幸いなことに、これまでの社会学や美学では、こうした課題に取り組む手がかりとなる研究がさまざまな形で試みられてきた。「社会美学」social aesthetics という言葉が使われている近年の研究はいうまでもなく、実質的に「社会美学的」な傾向をもつ研究が近現代の人文社会科学のなかに少なからず散見されるのである。そこで、これらの先行研究を手がかりとすることによって、誰もが社会美の知的考察を試みることが可能になる。その意味で、社会美学的な先行研究を参照することは、「社会美」における「社会」と「美」のイメージを感得することと並んで、「社会美のつづり方」に要求されるゆるやかな方法論の一つである。

それでは、社会美学的な先行研究にはどのようなものがあるだろうか。たとえば、2010年度ゼミで学生に配布し、ゼミ研究の資料として用いてきたものは次の通りである。

- ・石川三四郎の「社会美学」と関連論考
- ・G. ジンメルによる「社交性」の研究や社会学的美学
- ・九鬼周造による「いき」の考察
- ・A. ストラッティ、P. ガリアルディ、F. パレットなどの組織美学あるいは美的組織化の研究や「アーティファクト」への着目
- ・G. ベーメ、H. シュミッツによる「コミュニケーションの雰囲気」や「感情の空間性」に関する考察
- ・「住まい」「祭り」「空間」などの感性的価値をめぐる社会学的研究
- ・A. バリアント、J. コスノスキー、P. クリストリーブをはじめ social aesthetics をタイトルに含む近年の多様な英文論文
- ・E. スカリーによる「美の分配性」「美による脱中心化」「社会的取り決めの美」をめぐる考察

- ・I. カント、F. シラー、M. = J. ギュイヨー、岡本太郎、B. ステイグレールなどの議論を通じた「美的快感の社会性」に関する考察
- ・藤阪新吾による「鮎屋」、「商店街」、「テーブル」をめぐる社会美学的研究

もちろん、社会美学的な先行研究とみなすことのできるものは上記に尽きるものではない。「日常生活の芸術化」(W. モリス、宮澤賢治)、「コンヴィヴィアリティ」「ヴァナキュラーなもの」(I. イリイチ)、「物事のよさを直観的に知らせる信号としての美」(佐々木健一)、さらには、芸術から社会に向かう現代美学＝感性学の試み(W. ヴェルシュなど)など、近現代の人文社会科学の全体から幅広く多様な美的社会認識の試みを取り出してくることができる。今なお発掘されるべき先行研究は少なくないが、当面の教育研究実践を進める上での参考材料はそれなりに出揃ったのではないと思われる。

「社会美のつづり方」では、まず何よりも、人と人の交わりとしての「社会」状況にふれることが必要である。個々人の行為というよりも、個人と個人の関係性にふれること。これがゆるやかな方法論の第一である。次に、その社会状況に自らがまきこまれつつ、これを味わい、その美的快感を自覚することが必要になる。この美的快感は私的な生理的快感でも公的な観念的快感でもなく、報告者自らが感じとりつつ周囲の他者にも共有してほしいような共的な快感である。この美的快感の自覚がゆるやかな方法論の第二である。さらに、こうして得られた社会美記述を出発点として、社会美が現われるための条件や筋道への知的考察が始まる。その際、まずはこれまでの社会美学的な研究や考察を参照し、自らの社会美体験をこれらの先行研究と照らし合わせて理解しようと試みることが必要になる。この先行研究との照合が、ゆるやかな方法論の第三ということになるだろう。

以下では、こうしたゆるやかな方法論を意識して書かれた最新のゼミ・レポート(2010年度3回生)を二篇、そのままの形で紹介してみたい。社会美の感性的記述に知的考察が加わった、学部学生の手による社会美学的エッセイである。

「相互行為の嵐の中で、私は社会ですー私の社会美体験」

私が初めて社会美によって自らが社会的な存在であることを思い知らされたのは昨年春にアルバイト仲間で開催した新人歓迎会の席であった。

人数はちょうど十人、入ったばかりの新人から四年目になるベテランまでが揃っていた。テーブルは長方形のものが一つだけであり、必然的にその両側に五人ずつ座る格好となった。非常に整然としたスタイルである。ともすれば息苦しさを感じさせるような人員の配置でもある。だがそれが結果的に社会美を生み出す主たる要因となったのだから、アーティファクトが社会に与える影響とは一見して分からないものである。

飲み会が始まる。だが、この飲み会は乾杯の時点で普段の飲み会のコードから外れた。通常であれば幹事が乾杯の音頭を取るものである。しかし、幹事は情性と化した儀礼に辟易していたのか、単に悪ふざけをしようとしたのか、いきなり普段は無口であることで知られている〇〇さんに乾杯の音頭を取らせたのである。〇〇さんは戸惑いながらも何とも味のあるたどたどしい挨拶をして乾杯のコールを済ませた。今思えば、これが波乱の幕開けであった。

その後、皆の自己紹介などという儀礼的なイベントもあり、新人歓迎会はひとまず小康状態を取り戻した。いくつかのブロックに分かれてそれぞれで会話が進むという極めて尋常な様相で飲み会は進行しつつあった。酒を飲み慣れていない新人に先輩が強引に酒を勧めるという網膜に焼き付くほど見慣れた光景もあった。だが、そのような誰が決めたとも知れない「あるべき飲み会の姿」という規範はすぐに打破されることとなった。酔った四年生の△△さんが何の脈絡もなく突如、テーブルを対角線で結んだ反対側にいた〇〇さんに向かって大声で「〇〇くんってイギリス人っぽいよな!」と呼びかけたのである。〇〇さんは無茶なフリに当意即妙の答えを返すタイプの人間ではない。おまけに純和風だ。座に緊張が走る。どう返答するか、皆が固唾を呑んで見守っている。もはや後戻り

はできない状況である。下手をすれば大事故になりかねない。しかし、相当酔っていたのだろう。腹に力を入れた声で一言こう答えたのだ。「もちろん!」と。一座は笑いに包まれた。

よく考えてみれば意味不明な返答である。だが、一座はその捨て身の一言によって救われたのであった。それどころか、△△さんと〇〇さんの噛み合わない相互行為は社会美形成の引き金になったのである。というのも、このやり取りが良くも悪くも一座が話題を共有する方向に持っていったからである。話題の共有によって、散り散りになっていた社会は一つになった。

〇〇さんに爆弾を放り込んだ△△さんは他の人々にも次々と爆弾を投下していった。それに便乗した幾人かが、△△さんを時に制止しながら、時に煽りながら、話題を振る側に回った。そして、話題を振られた側はその無茶な問いかけに半分戸惑いながら、半分楽しみながら答えるのであった。こうしたいわゆる「無茶ブリ」は、本来嫌悪されるものであり、その犠牲者は、上手く返答できれば儲けもの、大半の返答は空振りに終わって一時的に社会から抹殺されるという、過酷なデッド・オア・アライブの瀬戸際に立たされるのであるが、この新人歓迎会の席において行われた無茶な問いかけはそのような悪い意味での緊迫感を孕んでいなかった。誰がどのような返答をしても、社会的に抹殺することはしないという暗黙の了解、どのような形であれ結果的に受容するという頼もしい基調音が我々を支えていた。大学生の飲み会でよく生じがちな、自らの社会的ポジショニングへの過剰な執着から我々は自由であった。

そうしてまたしばらくすると、△△さんに無茶な問いかけをされた人が、同じような問いかけを投げ返すという逆襲がしばしば行われ始めた。こうなると△△さんとして安泰の地位にはいられまい。便乗していた人々も同様である。問いかけのベクトルが逆転するという現象が起こり出した。こうして〈問いかけー一応答する〉という非対称的な関係が対称的な相互関係に転換され、場はいよいよ流動的になってきた。呼びかけ、応えるという相互行為が 5×2 の形に

人間が並んだテーブルの上を縦横無尽に飛び交う光景は、もはや単に楽しいというものではなく、圧倒されるもの、もっと言えば崇高なものですらあった。

このように堅固な形式を持った相互行為は各人の個性を捨象してしまうのではないかという危惧があるかもしれない。だが事態は全く逆で、形式があるからこそそこから個性というのが溢れ出してくるのである。5×2の長方形という厳格な形式が各人の個性をあぶり出していたのである。各人の個性が徐々に姿を現す中で、石川三四郎のいう「多趣の一味」が形成されるようになった。

コール・アンド・レスポンスの応酬という社会美は長くは続かなかった。やはり、堅固な形式を持った相互行為というものは参与者に強い緊張を強いるものだからである。さすがに皆徐々に疲弊してきて、しばらくするといくつかのグループに分散してそれぞれで話すという通常の飲み会スタイルに回帰した。緊張は人間を疲労させる。だが、緊張のないところに美も楽しみもない。ジンメルという社交とは、社会への埋没と社会からの離反との緊張関係を楽しむ遊びではなかったか。結果的に相互行為の嵐は三十分ほどで幕を閉じることとなった。

新人歓迎会での社会美体験が鮮烈であったのは、自分が世界の中心から脱して、自意識から解放される喜びを感じることができたからである。その席では誰も主役ではなかった。主役は社会、延いては社会美であった。その場では私自身、自分が相互行為の中にいる時でさえ、私という存在が自らの肉体を飛び出して、社会全体として生きているような感覚を味わっていた。それは自分が社会の中心になるのではなく、社会が自分の中心になるという、新しい次元の快感であった。エレン・スカリーによれば、美には自我を脇に寄せる働きがあり、我々を過剰な自意識から解放するという。新人歓迎会の席で私は、こうした「美による自己の脱中心化」を感じ、そして自らが社会的な存在であることを思い知らされたのであった。

社会美体験においては、当然まず社会美を感じるという快感があるわけだが、それに付随して、美によって自己が脱中心化されることで、自意識から解放されるという副次的な快感を得ることができる。これは副次的ではあるが、大きな快感である。普段、我々は「私は私である」という状況を淡々と生きているわけであるが、実はこれは非常に不愉快な状況である。というのも、「私は私である」という意識は、自分が自分としてしか生きられず、自分は死ぬまで自分以外の何者にもなれないという存在論的孤独と表裏一体であって、大変な閉塞感の中に人間を追い込むものだからである。よって、「自分らしさ」や「アイデンティティ」といった言葉に準拠して自己の人格をまとめ上げようという試みは、近代的個人という幻想のもとに存在論的孤独を呼び込むという、自らの首を絞める結果に終わる。

しかし、美によって脱中心化された人間はこのような孤独からは解放されている。社会美に主役の座を譲った人間は、その脇で口を開いて美を眺めるだけの傍観者ではない。彼はもはや社会そのものとなって、人々と一緒に美を感じる。自意識から解放された彼にとって、「私は私である」といった閉塞感はない。彼に待っているのは「私は社会である」という領域である。

とはいえ、常に「私は社会です」と言っている自分が社会であることを感じながら生きていると、日常生活に支障を来すようになって、大学で友人との関係に気を使いすぎたために単位を落としたり、店全体の雰囲気気を気にしすぎたためにアルバイト先で店長に叱られたり、面接官との相互行為に気を取られるあまり就職活動で失敗したりすることになりかねないから、常に社会として生きるというのも考え物である。日常生活では往々にして便宜のために絶対的個人として生きなければならないケースも存在するのである。ただ、就職活動の面接で、「私は社会です。社会として生きています」と、言ってみるものではあるが¹²⁾。

12) 2010年度「社会学研究演習Ⅰ（宮原）」中間レポートから。筆者は三田英信。同じ筆者による痛快な「短歌」がある。「ノックされ、ノックしかえすしあわせを、落としてきたか便器のなかに」。ドアの外側から「コンコン

飲み会という小社会のもつ雰囲気が刻々と変化
する様子が、丁寧で立体的な記述を通して鮮やか
に描き出されている。なかでも「相互行為の嵐」
という表現は新鮮である。「相互行為」という概
念は、これまでもその「頻度」「濃淡」「対称性」
などについて語られることはあった。しかし、
「相互行為の嵐」という表現とその認識の仕方は
おそらくこのエッセイを通して初めて活字化され
たに違いない。ここに社会学と美学の交叉点にあ
る社会美学的アプローチの強みが生かされている。
相互行為の活発な応酬はその場にいる誰もが
生き生きとなれる社会状況の美しさを生み出すこ
とがある。その様はときに「崇高」でさえある、
というのである。

このエッセイでは、一方では散文詩に近い感性
的記述と並んで、そうした社会の手ざわりに対す
る知的考察が織り交ぜられている。「多趣の一味」
(石川三四郎)、「アーティファクト」(組織美
学)、「社交」(ジンメル)、「美による主体の脱中
心化」(スカリー)をはじめ、さまざまな社会美
学的な先行研究の視点や概念が参照され、この飲
み会の社会美の理解を深めている。同時に、自己
とコミュニケーションに関する社会学的視点が導
入されて、現代社会における社会美の希少性や貴
重性を巧みに示している。同様に、社会美の体
得が閉塞した自意識からの解放を促すという実践
的洞察が伝わってくる。もちろん、ここでの社会
美学的な先行研究との照合、自己論やコミュニ
ケーションとの接合は、それぞれの論点において
より深く掘り下げていく必要がある。そうした作
業を丹念に加えていくことによって、このエッセ
イを核とした学術的な論考が熟成していくのだ
ろう。

終盤にある「社会美学が実生活上に不都合を来す
のではないか」という指摘は、冗談半分ではある
が、考えさせられる。この点で、ジンメルは「水
差しの把手 (とって)」について優れた考察を残
している。水差しは把手がついているからこそ実
用的な「道具」となるが、同時に、この把手が本
体と調和しているからこそ美的な「鑑賞品」とも

なるのである。社会的相互行為もこの「水差しの
把手」に見立てることができる。人と人の交わり
も、一方では現実生活の実用的な要請を満たしな
がら、他方では、それ自体が目的となるようなコン
サマトリーな美的快感への要請にも応えていく
ことができる。社会は実用性から切り離せない民
芸品に見立てることはできても、自立した芸術作
品に見立てることはできない。現実社会そのもの
のうちに美を見出す社会美学は芸術至上主義や耽
美主義とは相容れないから、「実生活上の不都合」
の心配はないはずである。

偶然が織りなすハーモニ—わたしの社会美体験 ・三宮の喫茶店にて

今年の春、わたしのアルバイト先での出来事
である。大学入学と同時に始めたアルバイト
は、〇〇発祥の老舗喫茶店である。休日やお盆
などの特別な日は列ができるほど忙しいときも
あるが、平日はのんびりとしていて、店で流し
ているクラシック音楽とともに時間がゆっく
り流れる。手持無沙汰なときは、お客様と世間
話をするのもしばしばである。わたしもここ
でアルバイトをして3年目に突入しているの
で、顔なじみのお客様の方から話しかけてくだ
さることが多くなった。

店は〇〇の地下道に店があるのだが、広い入
口には扉がないので店の外と中の境界が曖昧で
ある。入口には、色とりどりのケーキが並べら
れたストッカーとクッキーやゼリーなどの製
品、傘立てとレジがある。わたしはいつも店の
外と中の真ん中にあるレジの前に立ち、お客
様の呼び込みをしている。老舗だけあって、客
層は40～70代の女性や老夫婦が多い。常連客も
わたしの祖父母世代の方々が中心だ。その常連
客の中に、愛猫を連れて半年に一度くらいの頻
度で訪れてくださる60代男性のお客様がいる。

いつもどおり、いらっしやいませ—お久しぶ
りですね、猫ちゃんもまた連れてきてくださ
ったんですね、とレジから声をかける。お客様
も笑顔でこんにちわあと挨拶をしてくれ、どや、

(もしもし、入ってますか?)」と打診があれば、内側からは即座に「コンコン (はい、入ってます!)」と応じ
る。何の他意もためらいもない、人と人との間の純粹で明快なコミュニケーション。ここにもささやかな社会美
がある。このしあわせは用を済ませて外に出ると、そう容易には見つからないものなのだ。

この子また大きくなったやろう、相変わらずようけ食べるんや、と言いながら慣れた手つきで傘立てに猫の首輪をひっかける。飲食店なので、店内へのペットの連れ込みはご遠慮いただいているのだ。その行為が終わってからも、まだお客様は店内に入らず、わたしを含めて従業員が表に出てしゃがみこみ、猫を撫でながら他愛もないお喋りを少し続けた。撫でるたびに首に付けている鈴がチリリンと鳴る。

この猫は人に慣れているのか、わたしが撫でも何一つ気にせず、フサフサとした柔らかく白い体を表でゴロリとさせたまま大人しくしている。垂れた耳が可愛い。

ひととおり喋り終わると、猫が見える入口に一番近い席にお客様をお通しし、注文をとった。この日は平日で、特に仕事が忙しいわけではなかったので、女の社員さんは注文の品を持って行ったままそのお客様と喋っていた。わたしはというと、新しいお客様が見えるわけでもなかったので、相変わらずレジの前に立ち、毛づくろいする猫をじいーっと見ていた。ペットを連れて来店するお客様は、今までこのお客様以外に出会ったことがない。だから毎回このお客様が猫を連れてきてくれるのをわたしは楽しみにしている。可愛い猫を観察するのは暇つぶしに持ってこいであるからだ。

すると遠くの方から、あっ猫がおる、見てみて、ほらあー、寝てるよお、と叫ぶ声が聞こえて、幼稚園くらいの男の子がこちらに向かって走ってきた。猫の目の前に来ると男の子が恐る恐る手を伸ばす。猫がゴロリと態勢を変えたので男の子がちょっとびっくりする。鈴がチリリンと鳴っている。でもまた触ろうとチャレンジする姿が微笑ましい。後からベビーカーを押したお母さんがやってきて、本当だ、可愛いねえ、でもそんなに近づいたらアンタ引っ掻かれるかもしれないよ、気いつけて、と優しく声をかけた。店先に猫が寝そべっているという光景が珍しいのだろう。

〇〇の地下道なので人通りが多いが、店の前を通る方々はみんな視線をこちらに向け、猫を見つけてはにっこりと微笑んでいた。そのうち20代のカップルが立ち止まって、男の子と猫の

じゃれあいを楽しそうに見つめていた。じゃれあうたびにチリリン、チリリンと鈴が鳴る。2、3組の老夫婦も、猫ちゃん大人しいねえ、人に触られても嫌がらへんのやわあ、まっしろで大きい大福見たい、と言いながら立ち止まっている。ついには猫を連れてきたお客様が表まで出てきて、この子うちの子なんですわ、可愛いでしょう、うちの自慢やねん、ほら全然嫌がらへんから撫でてくださいよ、さあさあ、と話しかけにきた。いつのまにか男の子だけではなく老夫婦も腰をかがめて一緒にフワフワの毛を触ってチリリンと鈴を鳴らせている。ほれ、お姉ちゃんも一緒に撫でたって、と呼ばれてわたしもレジから離れて輪の中に入った。

気がつけば、ほんの数分の間にわたしの目の前には小さな人だかりができていた。店の外の空間と店の中の空間、その真ん中にもうひとつ新たな空間が形成されている。店の外には、店には用がなく、ただ目的地に向かって通りすぎる人の流れがある。店の中には、お茶を飲んだり、休憩するためにこの店を選んでくださったお客様がいる。そしてその真ん中には、特に店に用があったわけではなく、たまたまここを通りがかった人々と店のお客様、幼稚園生からお年を召した方まで、たぶんこれから二度と出会わないかもしれない見知らぬもの同士が集まり、猫を囲んでほっこりと談笑している。

ふと3つの空間を観照したときに、わたしはこの真ん中の空間にあたたかい心地よい雰囲気を感じた。何か目的を持って集まったわけではなく、なんとなく自然に人と人が寄り添い言葉を交わしている。言葉にできない、じーんとした何かで包まれているようだった。猫に一生懸命になっている男の子の真剣なまなざし、その男の子を見守るお母さんの温かいまなざし、孫を見るかのような優しい視線を男の子に送る老夫婦のまなざし、それを一步一步引いて見つめるわたしのまなざし、そしてこの空間の主人のような飼い主のまなざし。たくさんの方のまなざしとお喋りが交差して雰囲気がキラキラ輝いていた。

ここにわたしは石川三四郎の言う「ヴィブラシオン」「リズム」「サンフォニー」が存在していると思う。猫と遊んで嬉しそうな男の子の

笑い声や周りの会話、撫でられるたびに鳴るチリリンという鈴の音が一緒にたになり、リズムカルな振動となって固定し停止することなく空間に伝わる。その振動にわたしたちは無意識に共鳴しており、ひとつの調和的空間が創られる。空間の周りには、ケーキストッカーから漏れる甘いにおいや、地下道にひしめく店から聞こえる呼び込みの声、通り過ぎる人の話し声やキッチンで料理を作る音が絶え間なく流れ、その個々のリズムが空間のリズムへと移行している。またこの空間は必然ではなく、偶然のコミュニケーションが重なったものであり、個々の独自の態度が絡み合って交響的な調和を生み出している。この「ヴィブラション」「リズム」「サンフォイニー」が一体となって存在していたことで、わたしはこの空間に「社会美」を感じたに違いない。

最近知らない人と話すという行為が避けられている気がする。知らない人についていっちゃだめよ、とか、知らない人からモノをもらってはいけません、とか小さいころによく言われたものだ。でもそのころ、近所のおじいちゃんおばあちゃんや、お母さんの買い物についていって出会う店先の大人は“知らない人”ではなく挨拶をしてちょっと会話を交わす“知っている”人だった。今も全く同じような環境にあるのだろうか。マンション生活で隣に住んでいる人もあまり知らない…というのは今のわたしも痛感することである。

エレベータで乗り合わせた人に挨拶をしようと思っても、避けるかのように端の方にたたずんで視線を合わさない人は多い。大型スーパーの普及で買い物は機械的になり、いわゆる商店街で繰り広げられる交流なども確実に減っているだろう。わたしより年齢が低くなるにつれて“知らない人”の割合は徐々に増えているのではないか。だからこそ今回の光景はとても嬉しい気持ちも入り混じっていた。久々に見たなあと思う。特にわたしと同年代の若いカップルもこの空間の中にいたことは、すごく印象的でさらにこの空間を魅力あるものに行っていると感じ

た。

全くお互いを知らない、世代も異なる人々がひとつの空間を形成して交流しているのはとても美しい。でも、日常的な光景のはずなのに、なぜか懐かしい気がする。若者の間でも電子機器を通じた交流が、主とは言わないまでも対面では取って代わることでできない重要な交流になっていることは否めない。だからこそ今回のように偶然が生んだ互いに見知らぬもの同士のface-to-faceの空間はかなり貴重だったのかも、とさえ考えてしまう。しかしそれはとても寂しいと思う。同世代ばかりの「ヨコ」のつながりではなく、世代を超えた「タテ」のつながりがもっと増えれば、今回の光景も貴重な社会美体験ではなく、当たり前にある社会美として存在できるようになる。たぶん当たり前になっても輝きを失わないほど、この光景には動的な美しさが内包されているだろう¹³⁾。

このエッセイは社会美記述として大変に魅力的である。自分自身が状況にまきこまれていながら、いや、まきこまれているからこそ「わたし」がゆるまり、状況の全体をあるがままに体感し、丁寧に味わうことができる。とくに、この喫茶店の「内側の座席」と「外側の通路」の「境界」に出現した小社会に対する「観照」がすぐれている。視覚だけでなく、聴覚（「猫の鈴のチリリン」「話し声」）、触覚（「フワフワの毛」）、嗅覚（ケーキの甘い匂い）が活発に働き、猫をきっかけに集まってきた人々の間に漂う幸福な雰囲気が着実に伝わってくる。雰囲気というものが「私が関わっていないながら、私とは別に存在する」ということ。場に共有された雰囲気は「準客観的」（G. ベーメ）であり、当事者は推測や想像ではなく、直接に肌でそれに触れるということである。また、その際、「わたし」も場に溶け込み、「準主観的」に状況を感じとっている。「見る」のではなく、「観る」のである。

レジ近くの境界には、内側の座席とも外側の通路とも異なる、目的なき遊びのための空き地が生まれている。そこに「偶然が生んだ互いに見知ら

13) 2010年度「社会学研究演習Ⅰ（宮原）」中間レポートから。筆者は福岡彩。

ぬもの同士の face-to-face の空間」が形成されていく。ほんのささやかで、つつましいけれども、ここには「社会形成のよろこび」(ジンメル)が息づいている。その社会的状況の美しさが、石川三四郎の社会美学の観点に照らし合わせて考察される。子どもの笑い声や集まってきた人たちの話し声、通路に響く呼び込みの声、通行人の話し声が混ざり合い、猫の鈴のチリリンやケーキの甘い匂いととも、リズムカルな振動となってその場に流れ出す。猫と遊ぶ男の子とその母親、何組かの老夫婦、飼い主の男性、若いカップル、そして「わたし」という、さまざまな「まなざし」が交差して、場の空気がリズムカルに振動する。ここには小さな「社会交響楽」(石川)が、誰が指揮するのでもなく演じられている。そしてこの交響楽は内側の座席にも外側の通路にも流れ出しているのである。

報告者はこの人だかりのなかにいる自分と同年代の若いカップルに注目している。それによって、この社会空間は魅力を増している。同世代の「ヨコ」のつながりだけでなく、世代をこえた「タテ」のつながりがもっと混ざれば、この小社会はより美しくなるだろう。この考察は石川三四郎のいう「縦と横とに綾羅をなせる複式網状組織」としての社会イメージを思い起こさせる。それは人々が「趣味」「職業」「地縁」などにしたがって縦横無尽につながるユートピア的な社会像である。

こうした観点から、エッセイの終盤にある、現代社会における個人化の昂進、見知らぬ者への警戒と交流の欠如、電子メディアによる対面的接触の回避といった問題を考察していくことも必要だろう。また、そのなかで個人化や監視、電子メディアをめぐる現代社会学のさまざまな知見を検討することも必要になる。そうした展開を通じて、この社会学のエッセイはより知的で学術的な論考へと熟成していく可能性をもっている。

5 「社会美のつづり方」から「社会美の知的考察」へ

以上、社会美の感性的記述に知的考察を加えたエッセイを二つ、ゼミ・レポートから選んで紹介した。こうしたレポートの延長上に、社会美学的な論文をはじめとする学術的活動がある。それは「社会美のつづり方」から進んで「社会美の知的考察」を目指すものであるが、後者はあくまでも前者を前提として成立することを強調しておきたい。

社会美学は社会美への気づきという体験を必要とする学術活動である。社会美の概念とイメージが感得されていなければ、社会美をめぐる知的考察は始まらない。とはいえ、これは決して単に主観的な活動ではないし、ましてや恣意的な活動でもない。ひとたび社会美らしきものが体験されれば、あとはその体験を吟味し、言葉に客体化して他者に開き、さまざまな先行研究と照合して考察を加えるという、一定の手順がある。私は本稿でこれらの手順を「ゆるやかな方法論」と名づけた。

具体的には、社会美記述が「社会」(人と人の交わり)に焦点を合わせているかどうかの検討、同じく「美」(美的快感)を感じとっているかどうかの検討、さらに社会美学的な先行研究との照合がなされているかどうかの検討という三点である。これらの三点に留意すれば、私たちの誰もが共同して探究を進め、考察を積み重ねていくことができる。そうした積み重ねを通じて、社会美学はこの社会を美的に認識する学術的活動として立ち上がっていくのである。

現在のところ、豊富な社会美記述を織り込んだ学術的研究としては、藤阪新吾による一連の論考がある¹⁴⁾。「鮎屋を味わうーとにもある食事の社会美学」「商店街の社会美学ー美しい状況としての共的な空間について」「テーブルとしての社会ー共の認識へ向けた社会美学の試み」「『ゴッドファーザー』の社会美学ー交わりのテーブルをめぐる」の四つの論考がある。なお試論的な性格

14) 『関西学院大学社会学部紀要』第107号～第110号、2009-2010年。

を残してはいるが、現時点での代表的な先行研究とみなすことができる。

教育実践としては卒業論文が重要だが、学部学生が社会美学の学術論文をいきなり書き上げるのは容易ではない。社会美記述のレポートであれば新鮮で興味深いものがたくさん書かれるが、その純度と濃度を維持しながら長文の論文に仕立てていくためには相当の労力と力量を必要とする。そのため私は卒業論文の全体を社会美学で染め上げるよりも、論文の一部に社会美学的な観点や体感研究の方法を取り入れることを勧めてきた。その結果、社会美学的な色彩を帯びた論文が現在までに40本近く書かれている。

純度の高い、すぐれた作品がいくつか生まれてきている。たとえば2010年1月提出の卒業論文では、『湯けむりの社交—銭湯の社会美』と『凹凸

が生むヴィブラション—温かな商店街の社会美学』がある¹⁵⁾。いずれも現地の社会空間を丹念に体感研究し、そこで出会った社会美を丁寧に記述している。その上で、関連する先行研究と対話しながら、「地域の日常生活に根づいた銭湯の社会美」や「凸凹なにぎわいのある商店街の社会美」をめぐる丁寧な考察を展開している。これらの卒業論文での知見と成果については、また別の機会に紹介することとしたい¹⁶⁾。

今後も、本稿で紹介したような社会美記述・考察の延長上に、より学術的な論考が数多く書かれていくことを期待している。そのためにこそ、私自身は、本稿で指摘した「社会美のつづり方」の方法論をより洗練させる努力を続けていきたいと考えている。

15) 著者はそれぞれ古田奈津子と原毅郎。『湯けむりの社交』は2009年度関西学院大学社会学部優秀論文賞の優秀論文に選ばれている。

16) 2011年1月提出の卒業論文では、「共飲への誘い—スポーツ観戦の社会美学的考察」「これからの公園を考える—社会美学的観点を含めて」「『かわいい』の魔法—女の子同士のコミュニケーション空間を味わう」「ゆったり空間を求めて—ブックカフェを味わう」「出会いの美学—九鬼周造の「いき」と「偶然性」を中心に」「Twitter 社交論—ゆるいつながりがもたらす社会美」などがある。

Describing Social Beauty—A Report from Educational Activities

ABSTRACT

This paper is a report on the educational practices of social aesthetics in this researcher's classes and seminars at the School of Sociology, Kwansei Gakuin University. Nearly four years have passed since this researcher began introducing social aesthetics into teaching and research activities in undergraduate seminars. In these educational and research activities, each student has been encouraged to describe or write out his/her encounter with 'social beauty' in everyday life. The descriptions of their experience of 'social beauty' have been mutually shared and examined through group discussions in order to understand the aesthetic (i.e., neither physiological nor ideational) pleasure of feeling the 'social' (i.e., association of individuals). The descriptions of 'social beauty' have been not only appreciated in themselves, but also utilized as primary data for intellectually analyzing the conditions or principles which may underlie the emergence of 'social beauty' in light of various socio-aesthetic studies in social and human sciences (G. Simmel, S. Ishikawa, Organizational Aesthetics and others). Based on the reports and essays on 'social beauty' written for by the students, this paper proposes a general guideline for 'describing social beauty' and examines a method of doing social aesthetics that starts from the awareness of 'social beauty' in everyday life.

Key Words: social aesthetics, social beauty, association, common pleasure